

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25245072

研究課題名(和文) 学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究

研究課題名(英文) Multidisciplinary Research on Dynamic Order Formation within Schools and Other Educational Spaces

研究代表者

桑原 知子 (KUWABARA, TOMOKO)

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：20205272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,800,000円

研究成果の概要(和文)：いじめ、学級崩壊等、学校教育を揺るがせる秩序形成をめぐる問題の解決として、従来、整合的な外的秩序への回収という規律・管理が考えられていた。本研究では、こうした秩序が揺らぐ事態を子どもの存在をかけた新たな秩序形成への試行(力動的秩序形成)として捉え直し、これまでと異なった問題解決への問いや方法を検討した。そのため、学問領域を横断する多次元的研究により、学校、地域・社会、家庭という教育空間におけるゆらぎと新しい秩序形成の実態をフィールドとの関係のなかで明らかにした。以上の成果をもとに、力動的秩序形成を促進する、教育空間相互の間での協働を実現するシステムや支援の在り方の道筋を示した。

研究成果の概要(英文)：Whereas the present scholarly consensus locates the solution to “order formation” problems such as bullying and classroom breakdown in the further strengthening of discipline and management of external conformity, this research has investigated a novel alternative approach; understanding disorder as struggles towards the formation of a new order (dynamic order formation). Through a multi-disciplinary approach, focusing on in-field situations, we have clarified the concrete processes of disorder and order formation in the educational spaces of home, community, and school. Based on these results, we have outlined the systems and support structures necessary to effectuate mutual collaboration between multiple educational spaces in order to promote psychodynamic order formation.

研究分野：心理臨床学

キーワード：多次元的研究 力動的秩序形成 教育学 教育空間

### 1. 研究開始当初の背景

校内暴力、不登校、学級崩壊、いじめなどは、従来学校教育の秩序を揺るがす問題だと定義され、それへの対応として、教員の指導やスクールカウンセラー等により、秩序から逸脱した成員を秩序の中に回収するという、規律と管理という方法が採用されてきた。また教育という営み自体も、児童・生徒に対して一定の秩序や規範を内在化させていく過程として捉えられていた。しかしながら現在、この前提が崩れはじめ、教育の制度や価値、規範などを自覚的に捉え直す必要が生じている。このように教育を取り巻く環境が揺らぎ、多様化する中で、従来どおり、外部に静的に存在する統一的秩序を想定し、そこへの回収と平衡の維持を行うことを、教育と考えることはもはや難しい。したがって現在求められるのは、学校、地域・社会、家庭、電子空間といった複数の空間での人々の相互作用の在り方を明らかにし、秩序のゆらぎがどのようなものであるか、そしてその中でどのような秩序が動的に新たに立ち上がってくるかを探究することである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、教育の場における秩序を静的かつ受動的に与えられるものとみなすのではなく、教育者及び被教育者とその環境との動的な関わりを通じて生成されるものと捉えたい。そのような秩序イメージに基づいて人と環境との基盤づくりを促す営みを「力動的秩序形成」と名付け、その生成に関する実践研究を行うことである。本研究では、具体的なフィールドでの研究と実践の成果をもとに、教育空間における力動的秩序形成のための汎用性のある提案を行う。

### 3. 研究の方法

本研究では学校、地域・社会、家庭という、いずれも子どもが生きる教育空間、さらに、現代社会において喫緊の課題となっているバーチャルな空間を対象とする。それぞれの空間においてどのような秩序のゆらぎが生じているのかを解明し、次にそれぞれの教育空間に具体的に働きかけてどのような力動的秩序形成が生成されるのかを見出し、さらに、すべての教育空間に通底した、新たな力動的秩序形成が見出されるのか、また、それはどのようなものであるかを明らかにし、新しい「知」のデザインとして表明する。また、研究目的を達成するために、学校、地域・社会、家庭において、ミクロからマクロに至るテーマを設定し、それぞれのテーマについて専門を異にする研究者が共に関わり、解明関わり 新たなデザインの呈示を行う**5つのプロジェクト**を遂行し、さらに国際比較を通じた研究の深化をめざす。

### 4. 研究成果

#### (1) 学校改善のための総合的アクションリサーチ (学校改善プロジェクト)

学校改善プロジェクトでは、学校の授業や指導方法の改善を通して新しい力動的秩序形成の可能性を探った。継続的に同じ学校（和歌山県立和歌山高校、京都府立園部高校、京都府立嵯峨野高校、京都府立洛北高校、福岡県立京都高校、京都市立高倉小学校、長崎市立池島小学校など）に関わることによって、縦断的变化をとらえ、時間軸も含めた力動的秩序形成のありさまを明らかにした。

学習指導要領改訂、高大接続改革といった、教育改革の展開の中で生み出されつつある教育実践の新しい力動的秩序の形（教科の壁を緩やかにし、教科間のコラボも組織

化しながら、教科横断的要素を含みこんでカリキュラムを構想する、教師が教える子どもが学ぶという一方向的な関係を問い直し、教師も子どもたちと学び合い、子どもたち同士も教え合い学び合う関係性を創出する、客観テストで学びの価値を一義的に数値化するだけでなく、思考の表現を解釈し学びの深まりを質的に記述するパフォーマンス評価を活用する）を明らかにした。そして、そうした理論的知見を実践レベルで具体化する仕掛けや手立ても構築し、ワークショップや教員研修を継続的に行うことで、学校現場とともに授業改善や学校改善を推進した。

また、研究者と現場とのかかわりについても、新しい力動的な秩序の在り方を探った。従来の大学の研究者と現場の関係は、研究者が理論を現場に紹介して実践を導くという垂直的で一方通行の指導・被指導の関係になりがちであった。これに対して、学校改善プロジェクトでのそれぞれのフィールドでの取り組みを通して、学校現場の課題を共有しながら、個別の現場のニーズや学校文化に応じて研究課題を調整したり、実践に学びながら理論を再構成したりといった具合に、より水平的で双方向的な協働関係のあり方が明らかになった。

#### (2) 不適応行動からみる新しい力動的秩序の形成過程 (不適応対応プロジェクト)

子どもたちに関わるさまざまな問題（いじめ・不登校・自傷行為など）に関する事例研究会を、心理臨床専門家と学校教員とのグループで2ヶ月に1度程度の割合で開催した。

その中で、不適応行動は秩序から逸脱した正すべき「悪」という側面だけではなく、新しい秩序形成に向けての新たなダイナミクスを生むきっかけであり、またその原動力となることが示された。また、現代の若者がかかえる問題に踏み込むため、高校生における「LINE」の影響をみる調査を実施し、学会で発表した。新しい秩序形成は、学校、家庭、社会という3つの領域に加えて、電子メディア空間においても生じていることが示され

た。成果は、学会誌に投稿され、採択された。

### (3) 近代的家族制度・関係のゆらぎについて (家族研究プロジェクト)

家庭裁判所とともに、研究会が開かれ、近代家族の揺らぎの実態に関する検討が行われた。特に離婚をめぐる面会交流の問題が中心に取り扱われ、家族が新たな秩序を形成する過程に立ち会い、検討をおこなった。

その経緯のなかで、子どもを守るための新しい秩序形成にあたっては、離婚する親のあり方が重要であるとの認識が生まれた。そのため、家庭裁判所との連携により、「親教育プロジェクト」を立ち上げ、離婚を経た家族が子どもたちをめぐる、どのような新しい秩序を立ち上げていくべきかという点について、議論を交わした。そして、これまで試行的になされてきた家庭裁判所における「親教育プロジェクト」の検証を行った。このときに作成された親教育のためのDVDは、京都家庭裁判所に留まらず、全国の家庭裁判所に広く知らされ、多くの家庭裁判所で採用されることとなり、よい結果を生んでいるという報告がなされている。さらに、新しい秩序形成を更に豊かにするための面会交流のあり方を検討するため、事例検討が行われた。また、少年事件に関わる「親子合宿」に、専門的立場から助言し、非行少年が更生して新たな秩序を得ていくきっかけとするために、いかに親子のあり方を変えていくか、その一助としての「親子合宿」を実施した。

### (4) 異文化・異業種による交流空間の創造 (交流空間プロジェクト)

二つの地域への継続的研究によって得られた成果は以下のとおりである。

野殿・童仙房地区（南山城村童仙房区および野殿区）においては、生涯学習推進委員会活動に参画し住民と協働して企画・運営した。実際に企画・運営にすることにより、教育・学習空間を創造する場合の具体的な可能性が明確になった。地元における「野童いなか塾」の定期的な開催は、例えば、水害の被災経験から学ぶ「減災の集い」「減災懇話会」など、災害経験を共有し防災意識を高めるうえで極めて有効な交流空間となること。2) 専門家を招き「学問世界」と出会う機会を作り、住民に「京大教育学部祭」に参加してもらうなど、地域と大学との実質的な交流も、新しい秩序空間の場となること。3) さらに、そうした実践から生まれた「童仙房ミュージアム」活動は、地域がもつ自然資源を活用して楽しむ「自然観察会」や「里山あそび」など、地域で「大人も子どもも一緒に学ぶ」時間と空間を創り出すこと。

京北地域（京都市右京区京北町）においては、地域住民（商工会議所、北桑田高校の教師、京北出張所の職員、カフェの店長、林業従事者）にインタビューし、そのフィードバックを行う中で以下の点が明確になった。1)

学生に地域の魅力を語ることで、実は、住民にとって、自らの地域の再発見の機会となり得ること。また具体的な当事者の心情、例えば、空き家の活用をめぐる、「仏壇や神棚を残しているから」、「先祖がそこにいるから」、他の人には貸したくない、あるいは「親戚が集まる場合にはやはりこの家が必要なので人に貸すわけにはいかない」という意見など、切実な状況が明確になった点も重要であった。

以上、大学の研究室で理念として考えることと、実際の現場で当事者が抱える具体的な問題との間には、常にズレが生じるのだが、そのズレを丁寧に伝えあい、理解し合うことが新たな「秩序」の出現へのきっかけとなる。秩序を崩す可能性を内に秘めた、新たな「秩序ならざる秩序」は、その出現への助走期間の内に、既に開始されているということである。

### (5) グローバル化あるいは社会変容にともなう教育・制度のゆらぎ (グローバル化対応プロジェクト)および国際比較を通じた研究の深化

国際比較を通じた研究の深化に関しては、まず、国際化・グローバル化という社会変化のとりえ方や学校教育における実態について文献研究を行った。最初に、グローバル化が、国によって進展度合いが異なると同時に、一国内においても政治、経済、社会の各領域で必ずしも一様に進む過程ではないこと、またグローバル化によって国を超えた共通化（統一化）の指向と差異化をめざす志向が共存することを確認した。それから、近代国家＝国民国家の形成に着目して現代における国家の特徴を整理するとともに、近代学校教育制度の基本的特質を検討した。続いて、グローバル化の進展が学校教育に与える変化について、学校に在籍する外国人児童生徒に関してどのような状況がみられるのかと、国際交流活動の展開が児童生徒にどのような影響を与えるのかという2つの点を手がかりに考察した。そして、国際交流を積極的に進めることで、国境という境界を越えた理解が図られる可能性が生じると同時に、他方ではその境界を強化してしまうおそれがあることが明らかになる一方、学習者のアイデンティティの境界をどのように形成するのが望ましいのかとか、様々に設定しうるアイデンティティの境界のバランスをどのように設定すればよいのか、あるいはそうした境界の可変性をどのように想定すればよいのかといった問いが生じることになった。以上のような文献研究と並行して、北京師範大学を主たる対象として、大学院学生の交流活動を展開した。本研究課題による共同研究を行った5年間、毎年度、北京または京都で大学院学生が主体的に企画運営する学術交流活動として、毎回設定されたテーマについて双方の大学院学生が研究発表と意見交換を行うとと

もに、広く社会を理解するための交流活動を実施した。また、北京師範大学の教員が京都大学大学院教育学研究科を訪問した際や、同研究科でソウル大学教育学科からの訪問団を受け入れた際には、科研メンバーが分野ごとに関連の議論を深めた。こうした国際交流の「現場」を重ねながら、家庭、学校、地域・社会、そして国家といったそれぞれのレベルで生じる秩序のゆらぎをどのように乗り越えるのかについて意見交換を行い、考察を進めた。

#### (6)統合と発信

以上のプロジェクト毎の取り組みに加えて、全研究者は定期的に討議し、毎月の合同研究会を通して、本研究全体の方向性に関するコンセンサスの醸成、異分野間の知的交流を通しての新たな課題の発見が行われた。そして、空間を越えて通底した新たな力動的秩序形成の様相を見出し、新しい「知」のデザインとして表明した。平成 27 年度には全体を見渡す企画として、総括シンポジウムを2日間にわたって実施し、さらに最終年度には、活動の総括を行うとともに、シンポジウムを開催し、まとめと発信の作業を行った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計83件)

福井 佑介、川崎 良孝、アメリカ図書館協会『戦後公立図書館基準』(1943年)の成立過程：量的基準を中心に、図書館界、査読有、69巻6号、2018、326-339

時岡 良太、佐藤 映、児玉 夏枝、田附 紘平、竹中 悠香、松波 美里、岩井 有香、木村 大樹、鈴木 優佳、橋本 真友里、岩城 晶子、神代 末人、桑原 知子、高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響、パーソナリティ研究、査読有、26巻、2017、76-88、DOI:10.2132/personality.26.1.7

Nishihira Tadashi, 'Preparation' for Creative Inspiration -from the teaching of Japanese classical 'Keiko; exercise and expertise', Journal of Integrated Creative Studies、査読有、電子ジャーナル、2017

Oishi S., Yagi A., Komiyama A., Kohlbacher F., Kusumi T., & Ishii K., Disasters, Values, and Job Preferences, European Journal of Personality, 査読有、31巻、2017、258-265、DOI:10.1002/per.2102

山名 淳、ビルドゥングとしての「PISA後の教育」現代ドイツにおける教育哲学批判の可能性、教育哲学研究、査読有、第116号、2017、101-118

石井 英真、資質・能力ベースのカリキュラム改革をめぐる理論的諸問題 教育的価

値を追求するカリキュラムと授業の構想に向けて、国立教育政策研究所紀要、査読有、第146集、2017、109-121

Kusumi T., Yama H., Okada K., Kikuchi S., & Hoshino T., A national survey of psychology education programs and their content in Japan, Japanese Psychological Research, 査読有、58巻、2016、4-18、DOI:10.1111/jpr.12111

楠見 孝、村瀬 公胤、武田明典、小学校高学年・中学生の批判的思考態度の測定：認知的熟慮性-衝動性、認知された学習コンピテンス、教育プログラムとの関係、日本教育工学会論文誌、査読有、40巻、2016、33-44、DOI:10.15077/jjet.39101

楠見 孝、南部 広孝、西岡 加名恵、山田 剛史、斎藤 有吾、パフォーマンス評価を活かした高大接続のための入試：京都大学教育学部における特色入試の取り組み、京都大学高等教育研究、査読有、22巻、2016、55-66

西平 直、「ジェネレイショナル・ケア」の危機と「不生」のゼロポイント：教育・臨床・哲学のフィールド、理想(特集 教育・臨床・哲学のアクチュアリティ)、査読有、694巻、2015、2-12

西平 直、西田哲学と「事事無礙」 井筒俊彦の華嚴哲学理解を介して、『思想』特集 西田哲学研究の射程、査読有、1099号、2015、27-51

Nishihira Tadashi, Subjectivity of 'Mu-shin' (No-mind-ness): Zen Philosophy as interpreted by Toshihiko Izutsu, Journal of Integrated Creative Studies International Center for Integrated Creative Studies, 査読有、1(創刊号)、2015、1-9、DOI:10.14989/199806

西平 直、世阿弥『伝書』における稽古の思想、道・身心・修行(実存思想論集)、査読有、29巻、2014、33-60

西平 直、易と元型：井筒俊彦『意識と本質』における「易経」、三田文学(特集 井筒俊彦：生誕100年)、査読有、93(117)巻、2014、172-177

C.Nagaoka, T.Kuwabara, S.Yoshikawa, M.Watabe, M.Komori, Y.Oyama, C.Hatanaka, Implication of silence in a Japanese psychotherapy contest: a preliminary study using quantitative analysis of silence and utterance of a therapist and a client, Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy, 査読有、4(2)巻、2013、147-152、DOI:10.1080/21507686.2013.790831

C.Nagaoka, S.Yoshikawa, T.Kuwabara, Y.Oyama, M.Watabe, C.Hatanaka, M.Komori, A comparison of experienced counsellors, novice counsellors, and non-counsellors in memory of client-presented information during therapeutic interviews, Psychologia, 査読有、56巻、2013、154-165、

〔学会発表〕(計65件)

桑原 知子、現代社会に求められる新たな秩序を考える 家族関係の視点から、公開シンポジウム「現代社会に求められる新たな秩序を考える」, 2018

西平 直、現代社会に求められる新たな秩序を考える 地域連携の視点から、公開シンポジウム「現代社会に求められる新たな秩序を考える」, 2018

南部 広孝、現代社会に求められる新たな秩序を考える 国際交流の視点から、公開シンポジウム「現代社会に求められる新たな秩序を考える」, 2018

岸田 蘭子、西岡 加名恵、現代社会に求められる新たな秩序を考える 学校教育の視点から、公開シンポジウム「現代社会に求められる新たな秩序を考える」, 2018

Nobuo Naruiwa, Tetsuya Kawabe, Tomo Shigeta, Reiji Sasaki, Nanako Kato, Asako Sasaki, Tomoko Kuwabara, Giichiro Ohno, Kentaro Watanabe, Relationship between mood states and ego states experienced by a Japanese wintering party in Antarctica(2), 南極医学医療ワークショップ, 2017

Tomoko Kuwabara, Psychological Approach to the Members in Antarctic Station as Closed Environment and the Re-adaptation to the Japanese life, 第6回大韓極地医学会秋季学術大会, 2017

Nishihira Tadashi, 'No-Mind' and 'No-Body': Toward the whole energy of the Field of no-mind and no-body, International & Transdisciplinary Symposium on Advanced Future Studies, 2017

Nishihira Tadashi, Views of Reincarnation: the perspective of Bhutanese Youth, Human Sustainability, 2nd Suku Joint Workshop on Human Sustainability, 2017

Nishihira Tadashi, keiko 稽古 and Shuyo 修養 self-cultivation in Japanese Philosophy, The Anthropology of Japan in Japan(AJJ), 2017

Fukui Yusuke, Social Responsibility of Libraries and Access to Library Materials, The 18th International Conference on Education Research, 2017

Kuwabara Tomoko, Psychological approach to the members in Antarctic station as closed environment and the re-adaptation to the Japanese life, 国際心理学会, 2016

Nobuo Naruiwa, Tetsuya Kawabe, Nanako Kato, Tomo Shigeta, Reiji Sasaki, Asako Sasaki, Tomoko Kuwabara, Giichiro Oono, Kentaro Watanabe, Relationship between mood states and ego states

experienced by a Japanese wintering party in Antarctica, 南極研究科学委員会 SCAR, 2016

Tetsuya Kawabe, Nobuo Naruiwa, Tomo Shigeta, Reiji Sasaki, Nanako Kato, Asako Sasaki, Tomoko Kuwabara, Giichiro Oono, Kentaro Watanabe, The third-quarter phenomenon in Antarctica: The relationship between mood, job, and personality, 南極研究科学委員会 SCAR, 2016

Nishihira Tadashi, 'No-Mind' and 'No-Body': Consciousness and the Body from a Japanese Philosophical Perspective, 1er Semaine Internationale du Corps, 'Living body experience', Université Paris-Descartes, 2016

Nishihira Tadashi, 'Preparation' for Creative Inspiration -from the teaching of Japanese classical 'Keiko; exercise and expertise', International Workshop on Advanced Future Studies, 2016

Nishihira Tadashi, Young generation in the rapid social change of modern Bhutan: life course, life cycle and a perception of 'reincarnation', International Symposium, Emerging Sciences for Wildlife and Culture in Bhutan, 2016

Nishihira Tadashi, "No-Mind" and the Body: Taking a Hint from the Later Philosophy of Nishida Kitaro, Beyond the Extended Mind; Kyoto Conference, 2015

T.Kawabe, N.Naruiwa, T.Shigeta, N.Kato, A.Sasaki, T.Kuwabara, G.Oono, K.Watanabe, Changes over time of mood and mental health during five Japanese Antarctic Research Expeditions, Open Science Conference in association with the SCAR BIENNIAL Meeting, 2014

Nishihira Tadashi, Bewusstsein ohne Bewusstsein' (Mushin): Eine Betrachtung von Bildungsprozessen aus Sicht der Zen-Philosophie, Erziehungswissenschaft, Psychologie und Soziologie, 2014

〔図書〕(計58件)

Yamana Jun, Bielfeld, Bildung in fremden Sprachen? Pädagogische Perspektiven auf globalisierte Mehrsprachigkeit. transcript, 2018, 292

桑原 知子 他、協同出版、教職教育論、2017、238

田中 耕治、ミネルヴァ書房、戦後日本教育方法論史上巻、2017、292

田中 耕治、ミネルヴァ書房、戦後日本教育方法論史下巻、2017、274

矢野 智司 他、ミネルヴァ書房、交感自然・環境に呼応する心、2017、460

矢野 智司、山名 淳 ほか、勁草書房、

災害と厄災の記憶を伝える 教育学は何ができるのか、2017、352

矢野 智司、西平 直、協同出版、新・教職教養シリーズ・第3巻 臨床教育学、2017、238

西平 直 他、晃洋書房、ケアの根源を求めて、2017、275

西平 直 他、創元社、無心の対話 精神分析フィロソフィア、2017、168

西平 直 他、創元社、ブータン - 国民の幸せを目指す王国、2017、248

楠見 孝 他、新曜社、探究！教育心理学の世界、2017、312

西岡 加名恵 他、ぎょうせい、新教育課程とこれからの研究・研修（次代を創る「資質・能力」を育む学校づくり3）2017、239

石井 英真 他、協同出版、教職教育論、2017、280

福井 佑介 他、京都図書館情報学研究会発行、日本図書館協会発売、現代の図書館・図書館思想の形成と展開、2017、245

桑原 知子、日本評論社、教室で生かすカウンセリング・アプローチ、2016、200

田中 耕治、図書文化、教育方法 45 アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討、2016、208

矢野 智司 他、岩波書店、変容する子どもの関係、2016、277

楠見 孝、岩波書店、ブータン王国の教育変容：近代化と「幸福」のゆくえ、2016、248

西岡 加名恵、石井 英真、田中 耕治、有斐閣、新しい教育評価入門、2015、286

稲垣 恭子 他、東京大学出版会、学校文化の指摘探究、2015、374

①西平 直、みすず書房、誕生のインファンティア 生まれてきた不思議・死んでゆく不思議・生まれてこなかった不思議、2015、264

②楠見 孝 他、新曜社、ワードマップ 批判的思考：21世紀を生きぬくりテラシーの基盤、2015、320

③山名 淳、勤草書房、都市とアーキテクチャの教育思想、2015、256

④矢野 智司、ミネルヴァ書房、大人が子どもにおくりとどける 40 の物語 自己形成のためのレッスン、2014、288

⑤稲垣 恭子 他、創元社、日本の論壇雑誌 教養メディアの盛衰、2014、352

⑥西平 直、岩波現代全書、無心のダイナミズム、2014、240

⑦山名 淳、西平 直 他、北大路書房、人間形成と承認：教育哲学の新たな展開、2014、229

⑧渡邊 洋子、明石書店、近代日本の女性専門職教育 生涯学習学からみた東京女子歯科大学創立者・吉岡彌生、2014、312

⑨田中 耕治、三学出版、教育評価と教育実践の課題「評価の時代」を拓く、2013、221

⑩渡邊 洋子 他、明石書店、日中韓の生涯学習、2013、304

〔その他〕

ホームページ等

<http://collabo.educ.kyoto-u.ac.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

桑原 知子 (KUWABARA, Tomoko)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：20205272

### (2) 研究分担者

・田中 耕治 (TANAKA, Koji)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：10135494

・矢野 智司 (YANO, Satoji)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：60158037

・稲垣 恭子 (INAGAKI, Kyoko)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40159934

・西平 直 (NISHIHIRA, Tadasu)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90228205

・楠見 孝 (KUSUMI, Takashi)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70195444

・大山 泰宏 (OYAMA, Yasuhiro)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：00293936

・渡邊 洋子 (WATANABE, Yoko)

京都大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：70222411

・山名 淳 (YAMANA, Jun)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80240050

・南部 広孝 (NANBU, Hirotaka)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70301306

・西岡 加名恵 (NISHIOKA, Kanae)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：20322266

・服部 憲児 (HATTORI, Kenji)

京都大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：10274135

・石井 英真 (ISHII, Terumasa)

京都大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：10452327

・福井 佑介 (FUKUI, Yusuke)

京都大学・大学院教育学研究科・講師

研究者番号：20759493